

有名キャラ官能小説CG集第401弾!!

こんなの・・・私の望んだ冒険じゃない!

エカリスレイク

H A H A C G S Y U I

Win
対応

Mac
対応

16MB
Memory

1024x768
32bit color

CD-ROM

全キャラ
音声収録

CD-R

成年向



小鬼の中でも隔絶した指揮の手腕を誇る希少種たるゴブリンロードの再出現という報は人々を驚かせた。辺境の街付近の牧場に襲来した前回のロードの出現、それよりさして間を置かぬ前例なき侵攻に王は異例の人事を発する。銀等級を含む幾つかの高位冒険者一党の招集に加えてほぼ最高位の金等級である剣の乙女を派遣する盤石の体勢——しかし、

「GROOOOB！！」
「ゴブリンの大群が背後にっ……一体どこから！？」
「まさか、ゲートスクロール！？ひっ、こ……来ないでくださいっ！！ああッ……！」

迫る小鬼の大群が囃であり人員の拉致こそが敵の策であると気づいた時には既に全てが手遅れ。前線に意識を向けた人の陣容に紛れた一つの影がスクロールを取り出し、現れたゲートから溢れた小鬼の部隊が後方人員を襲ったのである。小鬼が撤収してゲートが閉じられた後……女神官、妖精弓手、剣の乙女ら数多の女性冒険者は影も残さず消息を絶っていたのであった。

「GRRROB！GROBGROB！！」
「ひぎっ、あゝあッ……見ないでくださ、んお`おおッ！？あ`ッ、こんなっ……ソコはあッ、あゝひい`いっ！」

迷宮深くの広大な広間に響く無数の喘ぎと人ならざる野卑な声、そして湿った肉がぶつかり合う穢れた衝突音。数え切れぬ女性らが卑に剥かれ小鬼らに翻られる中央にて我が物顔で座して抱えた女体を貫き犯すのは首領たるロードだ。その小鬼らしからぬ逞しき剛直で股を扶られる姿を女神官と妖精弓手に見せつけるように晒させられているのは剣の乙女である。

「ッ、まるっきり見せつけるみたい……下種にもほどがあるわ、くうっ！」
「地母神様、どうかあの方を邪な行いからお救い下さい……！地母神様、地母神様あ……！！」
「ひい`いいッ、そこグリグリっ……ん`オッ！？お、おかしくなってしまっ……へお`おおおンッ！！」

高き知恵で言葉通じぬ異種に意思疎通を図った剣の乙女は傍の2人の身代わりになる交渉をロードに飲ませた。人に明かせぬ秘密だが剣の乙女は小鬼に凌辱された経験があり、嫌悪感とはかくその痛みは既知である。忌避感に耐えさせれば堪えられる筈……そう意図してロードに挑んだ結果は、無残な有様。

「GR……！GROOOOOOB！！」
「いっひい`いいッ！？子宮熱いイッ……お`ひッ、あ`ッ！あゝ、うあ——」

そもそも彼女をかつて輪姦したのは女を知らぬ最底辺の小鬼達……要するに童貞の小僧である。それに引き換えこのロードは今まで人の女を幾多孕ませてきた熟練の存在で、女を騎り方など知り尽くしていた。ロードが嘲りと共にその子宮に種汁をひゅるひゅると放った時には既に正気を飛ばし失神し果てている剣の乙女。

「あへ、はへええ〜……どおか、おじひ……おへっくはひえ〜……」
「GRRR、GOB！」
「なんて酷い……いぎっ！？痛っ、難しなさいよ……やめっ、あぐうっ！！」

「お`オオッ、子宮……どちゅどちゅ突き上げられっ、あひい`ッ！嫌な筈なのに何故えっ、ひやぐう`うッ！」
「あ`っ、んぎっ……ねえさまっ、にいさまっ！誰か、たすけ……お`オッ、いひあ`あッ！！」
「地母神様っ、地母神様あッ……どうかお守りっ、へはあ`あッ！？そこゴシゴシやめ……んぎいッ！！」

剣の乙女が数々に弱みを知られてしまった性器を狙いすましたように突き犯され卑しい悲鳴を上げる。指で弄ばれる2人も小鬼への敵愾心で必死に自制を保とうとするが、悲鳴を堪えることは叶わない。彼女らの叫びに甘い色が混じっているのを察して益々地悪く手指と腰を動かさせ秘部を執拗に騎るロード。

「これ以上突かれたら……お`ほッ！」
「ダメ、キちゃ……ダメなのにいっ！」
「あ、頭白く……うぐうっ！」
「GRRR……GROOOOOOB！！」
「「あ、あああああああッ——！！」」

凌辱で互いに乱れ悶える姿を見せつけ見せられながら登ってはならぬ高みへ昇らされていく3人の犠牲者。キック拒絶しようとする妖精弓手の孔を屈させ、狭くも柔らかい女神官の孔を押し開け、絡みつく剣の乙女の孔を貪る。女を征服する恍惚感に快哉叫びながら興奮の極み目指してロードは腰を振りつづけ——

ドポドピュッ、ゴブゴブゴブッ！！ズニユドプウッ、ドバドボドグドグッ！！ミチィ、プビュルッピチピチビュルウウッ！！

「ちほしんさ……はっ、あゝあああッ！？おなかつ、ふくれっ……んい`いいいッ！！」
「やあああッ、ゴブリンにっ……そそがれながら、なんてっ！いやっ、あああッ……イツちやう`うううッ！！」
「どうか、どうかお慈悲をオッ……あああッ、注がれてえっ！？果ててしまいますうううッ！！」

性器から性器へと交互に煮え滾る欲望の迸りを注ぎ入れ既に種汁を溜め込まされた子宮を更に膨張させるロード。女神官と妖精弓手、そして剣の乙女は強姦による種付けを受けながら望まぬ絶頂を迎えさせられ悲鳴重ね叫ぶ。なお収まらぬ白濁を3人の身に浴びせかけながら凌辱者は満足げな哄笑を上げ放った。

「GRR、GROB！」
「GROB！GROBGROBGROB！！」
「GRRRRROB！GROB！！」
「あ、うああ……ひい`いいッ！？もうやめてくださいっ、ちほしんさ……もごあ`あああッ！！」

重ね晒した性器から汚濁を漏らし、胎の内が黒く汚れていく錯覚に茫然と絶望する3人。しかし、用は済んだとはかり背を向けたロードが発した命に手下達が湧き起ち群がればそんな暇も費える。好き勝手乱雑に彼女らを犯し始める小鬼らの喧騒と重なる悲痛な慟哭を、玉座にてロードは鼻で嗤い口の端歪めた。

「オルクボルグっ、たすけ……ぎひあああッ！？」
「もうっ、おゆるしをお……あ`ッ！？そこはっ、ひい`いいいッ……！！」
「GROB……！」

ここで孕ませた牝どもから生まれた尖兵らは辺境のみに留まらず人どもの居城の遍くすらも呑み込むだろう。安全な城郭にて責き身でいるつもりを着飾った人の牝どもをも手中に収め貪る未来を懸想するロード。その序曲たる少女らと女の悲嘆の輪唱をは小鬼の王の足元でいつ果てるともなく奏でられ続けるのであった。



それは如何なる混沌の者が仕組んだ手引きであったのか——いや、或いは人ならざる神の謀りだったのやもしれない。ともあれまるで示し合わせたかの如く人に仇なす混沌の手勢が方々に猛威を振るい出したのはつい先日。その被害に歯止めをかけるべく数多の戦力が抽出された都市部。そこに未曽有の小鬼の大群が押し寄せたのだ。

『ここにも小鬼がっ……ひいいい!?!』
『お母さん助け……いつぎやあぁあぁっ!!』
『GRRRRR……GROOOB!!』

火の手を上げ人の営みを奪われた市街を我が物顔で駆け回る小鬼ら。庇護者が遠く離れ無防備に都市に残っていた市民らを殺し、踏み躪り、犯す……そんな光景が数多都市街に。そして人々が逃げ込んだ建物の中にも繰り広げられていた。

『私初めでは恋人になって……ひぎおっ!?!』
『どうして誰も冒険者がいな……んぎやうううっ!!』
『誰かっ、助けっ……いやあっ!ゴブリンに犯されるなんて絶対っ……いつぎいいいっ!?!』
『なんで街にゴブリンがあっ……やめっ、ぐぎっ!?!あつぎやあぁアアアッ!!』

悲痛な叫び声为重なり響き渡るのは混沌の者らに抗う戦力の一つの拠点である。冒険者ギルド。急ごしらえの籠城も空しく破られたそこで小鬼らに女性らが組み敷かれ小鬼にのしかかれていた。その内一人のギルド職員服の女性は受付嬢。隣の赤毛の少女は牛飼娘……共に、小鬼の肉羊にて純潔を散らされる。

『あぐううっ、乱暴に動かないでっ……あッ!ゴブリンの汚いのが出入りしてるうっ!!』
『ッ、そっちの穴はあっ……んぐおっ!?!やああっ、前後からゴリゴリっ……ひっ!胸までええっ……!』

女性として成熟した豊かなボディラインの受付嬢を背後から組み敷いて股突き挟む小鬼の肉羊。年若くも更に並外れた発育の肉体をそこに重ねるように押し倒された牛飼娘の股にも積れた肉が潜り込む。その手ずら使って小鬼らの劣情を晴らすことを強要されながらの荒い強姦に2人は痛切な悲鳴上げ放った。

『ひいい、赤ちゃんいやあぁあぁっ!』
『やめて、お願いします……神様あぁあ、やあぁあつ!?!』
『GRRROB! GROOOOOB!!』
『ひっ、嘘……もう出るのっ!?!いやっ、離れななさ……離れてっ、ひいいい!?!』

やがて周囲で女性らを犯す小鬼らがいざり立つ奇声と共に身を震わせ生臭い異臭を迸らせる。結合部から白濁漏らし泣き喚く彼女らを見つつ、己を犯す小鬼が腰を速めたことに気付く受付嬢。必死にその身を振り解かんともかくも無慈悲に凌辱者は欲望とき放ち、下腹で粘つく音が響いた。

『GROBB! GRRRRROB!!』
『GROOOOB!!』
『ひいっ、一体何匹……こ、来ないでっ!きやあぁあぁっ、いやっ……ぐぎっ、ひっぎやあぁあぁっ!?!』
『こんなに相手にさせられたら絶対死んじゃ……ひぎっ!?!やっ、助け……もごおおっ、うぎゅうウウツ!?!』

失神し潰れた使用済みの女を粗雑に投げ捨てた小鬼らが新たに足された孕み袋へと群がって来る。犯されたばかりで腫れ上がる性器に、肛門に、口舌に両手に乳房の谷間に纏に髪に……身の遍くに添えられる肉羊。ずぶずぶと雄を乱雑に身へ突き立てられ、粘膜を肌を汚辱される不快さに受付嬢と牛飼娘は悲鳴を上げた。

『ぐぎい!いいいっ、お尻に二本なんて入らな……あッ、があアアアッ!?!抜い、て……もごおッオオツ!!』
『助けっ、誰でもいいからあつ……犯し殺されえっ、あッ!裂けちゃッ……いぎがあアアアッ!?!』

助けを求めようがそれはどこにも届かない。街中の女がこうして襲われ犯されており抗える者は今や皆無なのだから。かつて街の男らの羨望集め懸望された魅惑的な肢体も容貌も、唯の性処理用肉玩具として酷使される彼女達。その柔らかな体軀と粘膜を搾り立て犯し糺し悦楽貪る小鬼らの嬌声と悲鳴が広場を満たす。

『おねが、い……ごぶりんすれっ、げぶおッ!あッ、なに……はげしくっ、うあぁあぁあッ!!』
『ナカで、めちやくちやにっ……ぶつかって、ぎひあッ!?!まさか、やだあッ!ぬいてっ、ぬい……』
『GROBBBB! GROB!!』
『GROBGROBGROB, GROOOOOO!!』

想い人に捧げることを望んだ貞節は小鬼らに突き破られ、その名を呼べど救いが現れることはない。悲鳴に奪れ呻く牛飼娘と受付嬢に肉羊突き立てていた小鬼らがあらん限りの力で腰を揺すり始める。彼女等が身を振れどそんな抵抗は無いに等しく小鬼らは穢れた欲望の頂点まで昇り詰め――

ドビュルドグドグドグウウツ、ブビュルベチャドプウツ!!ドボドバツ、ブビュルネチャブチャツ……ドボブボオオツ!!

『しきゅう、はれつしちや……もごっ!?!うぶうううううっ……げぼっ、ごぼええっ!?!』
『んぐあぁあぁっ、くさいのがっ……ぜんしんにっ、ナカにいっ!う、あぁあぁあぁあぁっ……!!』

既に精の汚濁を受けていた胎を全て洗い流し更に満たさんばかりの勢いで子宮に、喉に、膈管に種汁が流れ込む。同時に全身に精を浴びぬ場所を無くそうとせんばかりに生臭い汚濁がプ子撒けられ、溺れるほどに浴びる2人。上げようとする悲鳴が精液の泡となって濁らされるほどに身の遍くを汚辱されるのであった。

『妊娠しちや……いやあぁあぁっ!』
『ゴブリンの赤ちゃんいらないイッ……あぐひい!いいいっ!?!』
『うぐぶっ……おげぼおッ、げへあぁあッ!?!がひゅ、げぶえっ……んにッ!あええ、もれるう〜……』
『おぼっ、ぐぶええ……あッ!ドドロロなお、ぶひゅぶひゅひひやってるの、お〜……』

べちゃりと種汁の泥沼と化した石畳に打ち捨てられ、尻穴と性器から種汁垂れ流し失神する牛飼娘と受付嬢。喉から鼻から青臭い白濁を逆流させつつ小水漏らして失神した彼女らの姿に人の尊厳は欠片ほど残されてはいない。周囲でも同様に種汁で総身を塗り潰された犠牲者が無様な様相で汚汁の泥沼に打ち捨てられる。

『あびやあぁ〜、あつひやかいのお……じよぼじよぼかかてるう〜んへえ〜……』
『あ、はは……おしっこしょっぱいいかわらひおべんきにされへるう、はひよおお〜……』

尿意を催した小鬼らが小便を放ち、まるで便器に放出する如く足元の犠牲者の顔に胸元に性器に浴びせる。最底辺の下卑た存在の便壺として扱われながら浅ましい表情で失神した彼女らは醜態晒し続ける以外にない。異臭放つ汚汁に濡れかけながら牛飼娘と受付嬢。そして広場中に転がる女達は知性感にぬめりを漏らし続けるのであった。

とある辺境の街が地図から消滅した惨事の顛末において、犠牲者らの末路を詳しく記した書は後世には残っていない――



「い、やあああッ！ゴブリンスレイヤーさんっ、皆さんっ……そんな、あゝあああッ！！」
「ッ……よくも皆をオツ、アンタ絶対許さないっ！殺してやるからっ、必ずッ……うぐああッ！？」
「グハハハ、脆すぎるぞ人間ども……所詮は雑魚の寄せ集めか！」

土と石……そしてより嗅ぎ慣れぬものの焦げた異臭含んだ黒煙漂う遺跡の底。
哄笑上げる銅色の肌をした巨体の怪物——オーガ、そしてその両腕に身を拘束された少女2人の姿があった。
周囲には人の形に辛うじて見える炭が散乱し、少女らは僅か前まで仲間であったその存在の末路に悲痛な叫び上げる。

「あまりにヌル過ぎて退屈なのでな……貴様らにはその身で愉しませて貰うとしよう！」
「なにを……ひっ、手を離してください！ああ、破れっ……いやあああッ！？」
「きゃあッ、コイツ……デカイナリして品性は小鬼並ねっ、くうッ！」

このオーガが人を侮る余裕を見せたのが彼らを不意打ちにて火球で焼く前でなく、その後であったなら。
たまたま炎の衝の中心から離れ生き残った……生き残ってしまった2人の命運も変わっていたことだろう。
しかして現実には女神官と妖精弓手の少女2人はオーガの魔手に落ち、その着衣を裂かれるのを許す他なかった。

「ムリですムリッ！これ以上はあッ、やめっ……おゝひぎあゝアアアアアアアアアア！？」
「あぎッ……ぐぎやうゝウウッ！？しきゅーにプチこまれッ……ほごえゝエエエッ！！」

メリメリと破碎を予感させる異音を立てて子宮頸部を突き破った剛棒が彼女らの子宮内を蹂躞する。
女としての中枢を直接突き扱われ強姦を受けるその衝撃と苦痛たるは如何ほどか。
女神官と妖精弓手は折れんばかり身を反らし、魂を踏み碎かれる如き絶叫上げ放つより他にない。

「あゝアアッ、おぐッ……やぶれたあゝッ、はががあッ！ごぼっ、ごぶ……すれっ、さあんッ！たず……ごほえゝエッ！？」
「アカちゃ……うめなくッ、がふうッ！？ズゴズゴするのッ、やめゝ……へげおゝオオオッ！！」
「GRRRR、GROB！GROB！！」

赤子を宿し育てる神聖な筈の器官が凌辱者の汚らわしい男根に踏み躪られる敗北感と凌辱の感覚。
耐えがたい苦難に少女らは我も忘れて助けを求め叫ぶもそれに応える救いの手が現れることはない。
子宮ごと肺腑まで叩き上げられる辛苦に慟哭する彼女らを犯し抜く鬼達は休むどころか動きを速め始める。

「あげあゝアアッ！？なにっ、まさかッ……いやあッ、ぐふオッ！？ゆるしッ、おねが……おゝつげえッ！！」
「んぐひいゝ、うげへッ！？いやよおッ、それだけは……やめッ、おげうッ！たしゆけッ……はぎやあゝアアッ！！」
「俺の種で孕めることを至福と思えい！ふめうらッ……！」
「GRRRR……GROOOOOOB！！」

オーガの告げた宣告と息荒げ猛然と凌辱を加速させる鬼の動きに何が起きるのかを察した2人。
恥も外聞もなく必死に泣き叫び懇願するもそれは凌辱者の興奮に油を注ぐだけであった。
そして腹部を突き破らんばかりに加速した上下動の刺激はやがて欲情の天元を突き抜けさせ——

ドグドボブビュルリィッ、ブボビュドバババァッ！ドブビュドグドグドグッ、ゴボボボブビヤドブボオッ！！

「ひぎやおゝオオオッ、おにやがッ……はれつずるううッ！！ごぼじんッ……がはッ、ぶぐえゝエエエッ！？」
「しきゅうがあッ、どぐどぐうってえッ……がひゅうッ！！もう、とめッ……んがはあゝアアアアッ！？」

小鬼の貧相な生殖器等とは容量も放出力も違う爆発的な精の濁流が子宮に直接流し込まれる。
暴力的を越し殺人的とすら言える桁外れな種付けの直射を無防備に浴び膨張を強制される少女らの子宮。
まるで妊娠、そして臨月にまで至ったかの如き勢いでて瘦躯の腹部が内から伸張され軋みを発した。

「あゝッ……あががッ！うそ、れすうゝうッ……こんにや、あゝッ！ゆめ、じえんぶう……ッ、おごあゝアアアッ！？」
「がひゅっ、ぜえッ……ッ、いぎいッ！？ひ、ひっこヌかれッ……おっごへえゝエエエエッ！！」

まるで水風船の如く丸みの内に溜まった体液の色まで透けかねぬほど腹を引き延ばされた女神官と妖精弓手。
マグマの如き種汁で子袋へ破裂せんばかりの内圧を受けた少女らは口の端より泡噴き白目剥かざるを得ない。
永劫の如き注入の末、ようやく停滞した肉筒を鬼らが引き抜き……破滅的な剥離音と共に汚液が逆流する。

「おゝッ、おおおおッ……ほおゝッ！ぜんぶっ、もれッ……んひえゝあゝアアッ！ドバドバふきでりゝゆうゝウウッ！！」
「んゝおゝおおおッ……へはあッ、はひいッ！ひゅうッ、ほひっ……ッ、ぐげへえッ！？あゝ、あゝがッ……」

子宮に食い込んでいた巨塊は粘液を張りつかせたまま体外へと抜け落ち、性器をあまりに無残な様へと化していた。
腫れた肉を外気に晒した股から精汁を噴水の如く撒き散らした足元へ投げ落とされ泥濘に沈む女神官と妖精弓手。
奇烈な責めに意識失い無様な表情のまま失神した彼女らに鬼の射精の残滓がへちゃへちゃと降り注ぐ。

「GROBBB……GROB！！」
「GRRRR！GROBGROB！！」
「おひっこも、おせーしも……とまらなひっ、おゝへえゝゝはあ、へはあ……ッ、ひぎッ！ご、ごぶりんッ！？」
「おゝ、あ……はぎやあッ！？な、なにこいッ……もおムリいッ！やすませッ……ひっぎいッ！？」

人の仇敵の種の生臭い異臭に身を汚濁されて小便漏らしながら意識飛ばし呻く少女2人。
人としての知性も誇りも感じさせぬ無残な末路晒す彼女らの身へ万々から小鬼が駆けてきて犯しにかかる。
激んだ間の底に再開された甲高い悲鳴とそれを詰る鬼達の哄笑が響き渡り飽えた空気を震わせるのであった。

悲劇の犠牲者達を贄として続けられる狂宴に終止符が打たれる兆しは未だ片鱗もない——



周辺に甚大な被害を出す小鬼の群れ……その危険性から居城の掃討には銀等級という在野最高位の冒険者一党が2組も投入された。女騎士と魔法の2人は各々の仲間の枠組みを越えて協働していたものの、予想外の敵の数に他の仲間と分断されてしまう。小鬼の群れを捌きながらも巢穴の奥底へ追いやられた彼女らを待っていたのは一枚の鏡と小鬼英雄——その数、4体。

「GROOOB！！」
「GRRR、GROB！！！」
「げっ！ぼおおつ、がへっ……しまっ、うぐええっ！！」
「……！今、助け——うつぐっ！？かはっ、ひゅぐっ……！」

緑の砂の荒野映す鏡は同じものが遠い遺跡にあったのだがそれを彼女らは知る由もない。小鬼の中でも希少な上位種であり驚異的な剛力を誇る小鬼英雄が4体……彼女等が凄腕と言えど抗えよう筈もなかった。女騎士は甲冑が砕けるほどの一撃を受けて崩れ落ち、魔法はその細首を振り上げられ石畳へ組み伏せられる。

「下劣な小鬼の統領がガン首並べっ、貴様らなどに私は負け……ぐざあ`アアアアッ！？」
「助け、来るまで——何とか、時間——あ、い……や——あ、っざい`イイイツ！？」

秘部への挿入だけでもその身の負荷たるや言語に比し難い痛切さだが、小鬼英雄らは順番を待ってやることなどはしない。先んじられたものらは彼女らの身を起こさせるとその豊かな尻肉を押し広げ排泄孔へと巨根を宛がう。意図を察した彼女ら各々が静止を叫ぶもそれは叶えられることはなく、再度響く凄まじき拡張挿入の異音と絶叫。

「やめろ`オツ、おげえっ！は、腹があっ……ぐぶええっ！？だ、だれか……きてく、おぼえ`ええええッ！！」
「ふと、すぎ——え`、ごおっ！前とっ、うしろっ……つながっ、ぐぎに`ィッ！ひんじや、う`っ——がへっ！？」

内臓を圧され肺から悲鳴を搾り出す苛烈な注挿を受け悶絶する魔法の悲愴な有様に女騎士は思わず静止を叫んだ。しかしそれは凌辱者の嗜虐心に火をつけただけであり、彼女の乳房を爪立て捻り或いは膨腹を押し潰して罵ってくる小鬼英雄ら。子宮がその両脇に揺がる卵巣ごと上げられ、結腸の最奥まで突き上げられる苛烈な責め苦に彼女は白目剥きつつ身をのけ反らす。

「んぐへえ`ッ、がひゅっ……わた——ごわ、れっ！ぐげっ、おごごごっ……ぐぶへう`ウウウッ！？」
「GRRR……GROBGROB！！」
「GROOOOOB！！」
「お願いだっ、それ以上は本当に死——」

前後から交互に魔法の腹を内臓ごと穿ち抜き至らぬ引き延ばしを強いていた小鬼英雄の腰の動きが急激に早まる。その繰回りを突き破ってしまうのではないかと思うほどに熱い増した破壊的な突き上げに言語の態なき悲鳴搾り出す魔法の喉。容赦なき掘削の加速が極限まで至った次の瞬間、粘質な水音が腹部の内から飛び出さんばかりの音量で響き渡った。

ゴボボボッ！ドボドボビュルルブシャアッ！！

「ふっざい`イイツ、おな——かがっ、ぐぶう`ッ！？お、ぶ……ぐぶろ`へぶえ`エエエエエッ！！！」

咆哮を上げた小鬼英雄らが身震いするたびその肉竿が脈動し魔法の胎の内へ注がれた体液の余剰がドボドボと噴出し溢れ出た。まるで水風船の如くその腹を膨れさせられ、処刑に似た負荷の重さに悲鳴すら上げられず白目剥き悶絶する魔法。孕んだと見紛うほど膨れた腹に収まらず股からは滝の如く、喉からもまるで噴水のように白く濁った種汁が逆流し彼女自身を汚す。

「GROB、GOB！！」
「ぶ、がっ……おげ、ぶえっ！お`……ッ、あがへあ`アアアッ！？あばっ……あ`、へあ～～～——」
「あ、あああ……」

するりとその身から肉栓が抜けるや、ガボリとヘッド詰まりの取れた下水溝のような異音と共に汚濁撒き散らす魔法の股。べちゃりと投げ落とされ自らの垂れ零した白き泥濘に沈んだ彼女は閉じる事を忘れたような両孔から精液を垂れ流し続ける。在野の最高位たる冒険者として羨望を一身に浴びた存在と思えぬ無残な醜態を彼女は小鬼英雄らの眼下にて晒すのであった。

「GRRRRROB！GROB！！」
「うあああ、なんてこと……げがはあ！？ッ、うぐあアアッ……まさか！？やめろ、よせっ……イヤだあッ！！」
「GROOOOOB！！！」

背中預けていた同僚のあまりに変わり果てた末路を愕然と凝視していた女騎士が衝撃に喘ぐ。猛然と彼女の身に剛棒を出し入れさせ始めた小鬼英雄らの行為の意味と待ち受ける末路を理解した彼女は身振り必死に足掻いた。しかしして憔悴した彼女では死力尽くそうとも拘束は揺るぎもせず、その身を扶く小鬼英雄らが荒く呻いた次の瞬間——

ブビュリ`ユウドボボッ！ゴボブツブリュリュババアッ！！

「ッ、あがあ`アアアアッ……ハラさける`ウウウッ！おぼっ……ぐげへえ`エエエエエッ！？」

遅く引き締まったその身をも丸々と内から激しく膨張させる濁流が女騎士の子宮へ腸管へ注ぎ込まれる。身を襲う膨圧の感覚、そのあまりの痛烈さに壊れた如く彼女が体軀を痙攣させる最中にも注がれ続ける凌辱者の子種汁。臨月の妊娠腹もかくやという伸張を強要してなお注がれ溢れた大量の余剰体液が堰を切った如く股から撒き散らされた。

「あ`……あ`あぁっ！はひ、ひい……ン`があぁっ！？お`、ひ……ぶべえっ！？ごぼっ、がへえ——」
「GROB、GRRR……」
「GROB？……GROBB！！！」

げぼり、品のない嘔吐のような音を立てて女騎士の性器と尻から遮りが引き抜かれ汚濁がプチ撒かれる。魔法同様自ら垂れ流した糞臭放つ白き泥沼に投げ捨てられた女騎士に銀等級の勇士らしき誇り高さは片鱗も見出せない。さてここからどう帰ったものかとこやつ小鬼英雄らの耳に喧しい人の氣勢が届き……彼らは武器を掴み駆け出した。

『ッ——！！』
『RRR——！！』
「あ`、ははうええ……わらひ、おひっ！りっぱな、きしにい……」
「こわれ、ひや……わらひい？もれ、お`ほお～……」
「GROB……？」
「GROBGROB！！！」

無残に打ち捨てられた彼女らの同胞が救出のため包囲を突破したのたろうか、激しい剣戟が彼方で響く。尤も、小鬼英雄が4体という過剰な戦力配置を知らぬ彼らがここまで至れることはあるまいが、そんな喧騒に気付くことなく意識を彼方に飛ばした彼女らの元へ、卑しい矮躯の影が数多駆け寄った。

「GR、GROBBB！！」
「GROBGROB！GROB！！」
「う、あ……ひいひいッ、よせえっ！もお、げんかいでえっ……んぶうッ、ふぐあ`あああッ！？」
「は、ひいひい……？わらひい——ごおに、に——おかしやれっ、お`ンッ！ひ、ひんじやうう～……ぎびいッ！」

臆病で下劣な小鬼の雑兵ら……物陰で豊富な獲物を横取りする機会を狙っていた彼らは降って湧いた機会に欲望猛る。最早身を持ち上げる余力もない彼女に群がりその股に尻に乳房に口に、己の不衛生な生殖器を突き込み始めた。在野最高位たる冒険者の美女らは、最底辺の存在である小鬼に思うまま犯されつつも力なく喘ぐより他にない。

「た、たしゆけれくりえ……このままじゃわらひっ、あがぁっ！ゴブリンのお、おトイレにい……はひえ`えええッ！！」
「ゆるひへえ、アタマあ——こわっ、ん`ごひイツ！だ、だりえかっ——おねが、お`ごほオ`オオオオッ！？」

巨根で掘削された孔の緩さを嘲笑し下劣な罵倒を浴びせながらも小鬼らは粘膜に肉竿擦り付け獣性満たしていく。下等な存在の玩具と化してその肢体の遠くを、胎の奥まで翻られ穢される女騎士と魔法。種汁浴びせられ更なる汚濁を塗布される彼女らのこの先の命運を知る者は人の世のどこにも居はしなかった。



「ここは……チャンピオンを相打ちで撃退して、救出されたのか？む……」
「あら、お目覚めですか？如何でしたか……私と彼女と、褥を共にして。」

水の街の地下にて小鬼英雄との死闘の中で倒れた彼、ゴプリンスレイヤーは見知らぬ寢所で目覚めた。そんな彼に声をかけた主は寝具の薄布一枚で豊満な裸身覆った剣の乙女と同じ姿で就寝している女神官。処女同士の奇跡の秘術により彼は己が危死に一命を取り止めたことを知る。そして――

「ふにゅ……ふえ！？ご、ゴプリンスレイヤーさん！あ、あの失礼しま――」
「お待ちを――お二方ともお話しがあります、奇跡の対価について。」

目覚めた女神官が己の肢体に気が逃げ去ろうとし、彼もまた立とうとするもそれを制して言葉続ける剣の乙女。小鬼退治の専門家たる彼には不本意ながら撃退された者らではなく、代替として格上の人員が再投入されると決まったこと。そして、秘術の代金として到底持ち合わせでは足りない金額が提示されたのであった。

「痛れば持ち合わせはあるのだが。」
「次来た時に払う、それが神の家で通じぬことをご存知でしょう？なれば……体で支払って頂きますわ？そちらの貴女も。」
「ひゃううっ……わ、私もですかあ！？」

「アッ、はぁっ！息が当たっ……ひやあうっ、舌があっ！？は、恥ずかしくて死にそうです……」
「あんッ、んはぁっ……よく馴らして下さいませ？初めてが痛いだけなんて辛いことですから、くうんっ！」

寢台が軋む音に甲高い悲鳴が混じり合って響く寢所の空気の中、青年と女2人が重ね合う裸身。剣の乙女、聖女とすら呼ばれ尊敬を受ける女がその生殖器に逞しい雄の器官を卑しく啜え街鳩の如く淫らに腰を振る。女神官、未だ聖女を知らぬ彼女もまた羞恥に震えながらも男の顔に股を乗せて処女地を舐め解すに任せていた。

「う、ぐっ……動き、すぎだっ！もう濡れ……ぐあぁっ！」
「下さいませっ、熱く滾る貴方の剥き出しの欲望をっ……ここにっ、んんんんッ！！」
「くひううっ、そんなに激しく動かしたらっ……やあぁっ、胸っ！？あ、ひあぁぁっ……！！」

剣の乙女の熱く濡けた肉厚の柔肉が絡みつきながら肉竿を扱き立てる。童貞であった彼には鮮烈すぎる快感。忽ちに頂点に至らされて興奮と期待に打ち震える胎の内へと生涯初めての膣内射精を解き放つ。同時に、戻る鼻先に秘部を深く擦られて更に剣の乙女の手で未熟な乳房握ねられた女神官も喘ぎ果てた。

「はぁッ、一度で枯れる精力ではないとは思ってましたけど……ふふ。まさかこれほどカたいままだなんて♪」
「はぁ、はぁ……私？ッ、あのその……見っとも無い姿をお見せしてっ、ひぁっ！？」

にゅと女神官の無毛の秘部が寛げられつつ唾液に滑る粘膜が亀頭へと導かれ……響く粘質な接触音。乙女の手で導かれ腰を沈める女神官は狭小な肉孔を送り盛る肉槍が抉し開けていく感覚に悲鳴漏らす。竿刺まれゆく側も先の剣の乙女とは違う狭くキツイ肉との摩擦の刺激に息飲んで呻いた。直後、

「あつぎいいっ……大きくて、カたいのでっ！ナカ、押し広げられ……ッ、いあゝあッ！！」
「狭い、くあッ……食い干切れ、そうだっ！」
「少しキツかったかしら……ゆっくり息をして、ええそうです。ふふ、ココまで収まっているの……分かりますか？」

ぶつりと何かを引き裂いて奥深くまで削直ぐ埋もれ、進った痛みに女神官は呼吸引き繋ぎせ仰け反る。あまりの摩擦感に胎の内を産卵を起す肉竿ごと挿れやすさように後らんだ華奢な下腹部をさする剣の乙女の掌。結合部から破瓜の証を、双眸から痛みか或いは本懐達げた歓喜の涙を奪す女神官の息が整うまで暫しを要した。

「わからな……もおっ、ふぁっ！痛いのには、気持ちよくて……あゝッ！怖いのに嬉しいなんてえっ……あゝアアッ！？」
「暴れるなっ、ぐっ……我慢がっ、うぐっ！」
「ふふ、果ててしまいませんか？大丈夫……もっと時間はありますから、んッッ」

訳も分からぬまま互いを激しく刺激し合い乱れ悶える2人を快楽の高みへ押し上げる剣の乙女の手。瞬く間に脳髓を高揚と喜悦に沸騰させた両者は急速に純白に染まる果てへ昇り詰めていく。剣の乙女の唇と指が強く女神官の局部を搾り上げた瞬間、その身が引き締め――

「もうダメですっ、あぁあぁぁッ！アタマ、まっしろにッ……ひあゝうううウツ！！」
「ぐうっ、締まりすぎだっ……で、るっ！うおおッ……！！」
「ん、はぁ……うさあ、恭悦の彼方を見に参りましょう？」

その言葉と共に始まった交わりは人というより理性無き獣同士が恍惚を貪り合うように激しいものだった。

「んじゅうっ、んじゅるるるっ！へわあッ、ごぶしゅれしやあんっ……あむっ、れるちゅるうゝううッ！！」
「おちんぼよりおっきいのがあッ、わたくしのアカちゃんべやたたいてえっ……コワれてしまいましたゅうっ！」

口舌を貪り合いながら猛然と腰振る獣の如き交わりを行い、拳までも生殖器に捻じ入れて乱れ悶え――

「おしりのお、いえっ……ケツアナにいい！せーし……ち、ちんぼじるっ！おちんぼじるドクドクくるうっ！」
「んひいんッ、オシリたたかれてジンジンするのイッ！もっとおっ、イタいのくださいゴプリンスレイヤーさんっ！」

排泄器すらも快楽のための生殖器と化させ背徳的な叫び放ち喘ぎ、尻肉を打摘されて喜悦に嘔び――

「んっ、もう出るんですか？ビクビクさせて……本当におつぱいお好きなんですね、あッ♪」
「私も大きくはないですけど……キモチよくはできますからっ！えいっ、んっ……ひっっ♪」

場末の淫売の如く卑しく男根に傳いて猥雑な牽仕を、先を競うように浅ましく施し――

「ほおおっ……おしっこ、もらしちゃってますうゝまるでアカちゃんみたいにい、ほへええ～……」
「あはあ、せーじよサマなのにだらしなくて……んひっ、わたしもおっ！あはへえ～……」

絶頂を繰り返して失禁する無様を晒す羞恥にも淫靡な悦びを覚え上がり狂って――
そうして、棄演けて寝食忘れ欲望の限りを果たした狂宴に果てが見えたのは月を跨いでからのことであった。

「ほひいゝいいッ、おっきいのっ……くるくるきましゅううっ！はててえっ、わたくひといっしょにいいっ……！！」
「おひらなっ、おァッ！？イッてるのに、いぐっ……イキますっ！あゝッ……あゝアアアアッ！？」
「だ、それ……はぁ、はぁあッ！でる、う……うぐっおゝあぁあぁあッ！！」

泣き顔も悦ぶ扱いも全て把握され切り、一挙一動にて達するほどの恍惚を与えられて乱れ狂う剣の乙女。その濡れた肉体に発情し切った身を擲り付け煽られる手で連し縛りながら女神官も悦楽に心身を浸らせ尽くす。漏らした小便を互いに浴びせ合い享楽に溺れる二人を猛然と犯しながら男も昇り詰め――

ドボボボビュルウゝウウツ、ブバピチドビュウッ！！ブビュドボドバツ……ドビュルルルウゝツツツ！！

「あひいいいッ、あいしておりまひゅっ……ごぶりんすれいやーひゃまあぁあッ！！」
「わらひもおおっ、しゅきっ……だいしゅきれしゅっ！ごぶりんしゅれいやーしゃああんゝッ！！」

魂の一滴まで搾り上げて注ぎ込んだような熱量の白濁を二人の胎に絡けて注ぎ肌にご浴びせかける男。それもまた天の彼方に理性を蒸散させ淫らな歌声を上げ放ちながら随喜の果てへ突き抜けたのであった。永劫に続くような白く混濁した法悦の末、唐突に弛緩が訪れて室内に静寂が戻る。

「ん……う、あ……」
「……、……」
「……あれだけケダモノのようにサカっていたのに今は遊び疲れた子供のようにですね、ふふ。」

裸身重ねたまま疲労から泥濘の如き眼りに陥る2人を見守り、剣の乙女は己の胸に刺す痛みに眉皺める。それは昔の自分によく似た少女に本懐遂げさせた代償行為で自分を慰める浅ましへの自嘲なのか。それとも揃って睦み合ったことで彼にとって己と彼女は女として等価と思わせたがる下賤な謀りへの自責か、

「耐え難い痛みを負わすのが現実なら、快楽に逃避して生きること何の咎があるのでしょうか――そう、思いませんか？」

誰に呼びかけるのでもなく呟き、彼女も猛烈に襲ってきた疲労と情眼に身を預けて同衾者に身を添える。この出来事で何かが変わったわけでも、誰かが救われたわけでもない――ただ、己の身を包む温もりが胸の内に残っている間は、悪夢にうなされることは無いだろうと彼女には思えた。



ある日辺境の街近くの牧場を襲った小鬼の群れは、かつてここに襲来した危機と比べものにならぬ小さなもの。小鬼の術師が一握りの手勢を従えただけに過ぎぬ矮小な集団はしかし大軍すらも手に出来なかった戦果を収奪していた。冒険者ならば抵抗の余地もあるうが一介の酪農家にすぎぬ牛飼いの娘は今や完全に術の支配に堕ちて淫声を上げている。その人並み外れて豊富な穀れんばかりの乳房で小鬼術師の肉竿を挟み、熱心に扱きたてる牛飼いの娘。

「GROBGROBGROB！ GROB！！」
「GOB、GROBB！！」
「んひいいんっ！ おっぱいの間っ、カたいのでズブズブ……あっ！ アソコとオシリも激しすぎるよおっ！」

小鬼の術師は自らが身に着けた魅了の術を行使し、この牧場に住まう娘を一切の抵抗させることなく得たのであった。冒険者ならば抵抗の余地もあるうが一介の酪農家にすぎぬ牛飼いの娘は今や完全に術の支配に堕ちて淫声を上げている。その人並み外れて豊富な穀れんばかりの乳房で小鬼術師の肉竿を挟み、熱心に扱きたてる牛飼いの娘。

「おシリの君もっ、おまんこの君もおっ！ こんなに激しく求めてくれるなんて思ってなかったからっ……んひいいいっ！」

つかいが複数に増えたとしても思い込んだのだろうか？ 自らを輪姦する彼と手下を同じ名で呼びつつ身を貫かれる彼女。それを眺めつつやはり人間は愚かだと優越感を乳房奉仕の快楽と共に味わった術師は下劣に昂ぶった息を漏らす。彼は得意の術で容易く人間どもの心を玩具にし、猥褻的な奉仕をさせるのを何より気に入っているのだ。

「GRRR、GROBB！！」
「ひぐうんッ、間の薄いところおっ……ゴリゴリされへえッ、んぎいっ！？ち、乳首とれちやううっ！！」

尻と股、両の孔に肉竿潜り込ませた小鬼の息が偶々合って両の鋭敏な粘膜を抉られた彼女が嬌声を上げる。薄い肉越しに熱い猛りが蠢き粘膜が蹂躪される感覚に我も忘れて乱れる牛飼いの娘。舌の牽仕が止まったことを叱責しながら術師は彼女のたわわな乳の淡色の先端を掴み、そして……

「はひっ、おっぱいからアツいの昇ってきてっ……あッ、噴くうっ！ おっぱい噴いちゃううっ！！」

乳房の過敏な突起に迸った鮮烈な刺激に感極まった悲鳴上げ身悶える牛飼いの娘。同時、その充血したシコリが震えを起こしドロリと乳白色の体液を噴き出した。それは母乳……つかいがとして種付け孕ませた雄のように術者を錯覚させ暮らせる術の副作用である。

「GRR……GROB！！」
「GROB！ GROB！！」
「搾らないでえっ、ほへええっ！ 噴いてる途中でギョウギョウされたらあっ、止まらなくなっひやうううッ！」

両の突起を握り上げてやればその度に反応よく乳汁が搾り出され、未知の刺激に牛飼いの娘は乱れ悶えた。まるで牛を犯しているようだ。人靴がウシとやっってこんな牛もどきを作ったのか……など下劣に手下らが野次る。歡和を持つ己と違い愚劣な浅ましさが持たない手駒にすら罵り罵られ、なお卑しく喘ぎ悶える牝を嘲る術師。

「ほおッオオッ、ひゅーひゅーするとお……頭あ、トケるうッ！ 私いっ、ミルク牛になっちやうううッ！！」
「GROBBB！ GRRRROB！！」

鋭敏な乳肉の中心を母乳が迸り突き抜けるたびに射精のような快感に襲われているのだろうか。表情をたらしなく薄かし切って淫らな啼き声上げ放つ痴態に術師の興奮は昂ぶる。勢よく噴乳する突起を手綱の如く掴み振り上げつつ牛飼いの娘に撒飛ばす術師。

「ひえひい、わかりまひっ……んへえええっ！ じぶんでおチ子しほりっ、キモチよすぎっ……ほへえッ！ あッ……！？」

命じられるまま牛の乳を搾るが如く己の乳房を揉み上げ搾乳し始め、その強烈な刺激に乱れ狂う牛飼いの娘。自らを鬨り墮落させるその卑猥卑賤な有様をせせら笑った術師は乳汁滴る合間に猛然と腰を振り立て始めた。同じく小鬼らも劣情昂ぶらせ彼女の股豆を、尻肉を握り握き鬨りながら体内をも肉竿で激しく抉ってゆく。

「GROB！ GROB！ GROBBBBB！！」
「GR、GROOOOOOOOB！！」
「あっ、くるのキちやうのきてえええっ！ キミのアカちゃんオナカにつくっ……あッ、へあッアアアアッ！！」

自らの母性の証たる器官を搾り立て迸る快感に陶酔していた牛飼いの娘が胎を激しく抉られ身を反らす。今や交わる各々が悦楽の極限へ疾走しているのは明らかであり、牛飼いの娘は感極まってトメを乞った。直後、一際激しい叫びが重なり粘つく湿った放音音が重なる肉の結合部から迸り……

ドビュルルルッ、ピチピチャァッ！ ゴボビュルポビュッ、ドグドグドグウッ！！ドビュルゴボッ、ブビュボビュルッウッ！！

「んひはあっ、アツいっ！ こんなこいのっ、いっぱいっ……ぜったいニンシンひちやったあ、あはあッ」

牛飼いの娘は自ら射精の如く噴いた母乳と浴びせられた種汁にドロドロに汚れ、体内にも下腹が膨れるほど精受けていた。ヒキ蛙の尻のような無様な姿勢で床に転がり股から溢れた白濁の濁みと黄金色の小水を垂れ流す。胎でその内を小鬼の解卵器としてトス黒く練され、人ならざる命を宿したことを微笑み浮かべ受け入れる彼女。

「GROBBB……GOB！？」
「GROB！！ GROB、GROBB……GROB！！」
「あひいんッ！ また、アイしてくれるの……あはあいいよ、たくさんアカちゃんハラませてえ……んちゅうううっ！」

やがて、股に種を付け続ける小鬼を退かせて術師が凌辱しようとし伸しかかってくれば上がる嬌声。胎の中身を掻き出して己の種を付け直そうという浅ましさに溢れた荒い凌辱にも彼女は陶酔の表情を崩さない。まるで恋人にそうするように牛飼いの娘は凌辱者と熱烈な口付け交わり、爛れた子作りを続けるのであった。

それから——月日は流れ。

「戻ったぞ……おかしい。これは、奴らの臭いだ……一体何が？ おい、無事……あ、あ！？」
「GOB！ GROBGROBB！！」
「GROB！ GROBGROB！！」
「あれえ、また一人帰って来たあ……んぎっ！ 良かったあ、いま丁度生まれるのお……おほお、おシリほぢりらめえっ！？」

胸騒ぎと共に牧場小屋に踏み入った鎧兜の男を迎え入れたのは変わり果てた姿の幼馴染、牛飼娘の末路。抱えるほどに肥大した臨月の如き……実際その通りのポテ腹をイキませつつ彼女は小鬼と乱交している。その無残な痴態の前に我を忘れ絶望する彼こそが彼女が帰りを待ちわびた本物の当人だと気付くことは今やもう無い。

「おほおッおおんッ、おっぱいっ！ アカちゃんのふんなくなっ……ほぎいッィッ、うまれるううッ！！」
「GROBB！ GROGROB！！」
「GRO……GROOOOB！！」

元から極度の巨乳であった彼女の乳房は妊娠に爆乳と言って差し支えないまでに肥大し乳を噴いている。それを乳頭齧る小鬼らに囁かれ排泄孔を囁かれ喘いでいた牛飼いの娘が股穴を齧撃させ白目を剥いた。そこから羊水が撒き散らされた直後、内から産道を押し開けて這い出して来る人に似た形の緑の塊。

「はががっ、あが……！ おオッ、はへえ……あは、みてえ？ わたひと、きみの……あかひゃんッ」
「gobbbb……grooob!!」
「あ、ああ、あっ……うああああああああああああッ！！」

股と膣の緒で繋がるソレを産み落とした牛飼いの娘に小鬼らの種汁が祝詞の如く放たれ汚濁の洗礼を浴びせる。出産の負荷による悶絶から寛めると異形の仔を抱えて胸元に抱き、心底幸福そうな笑みを男へ向ける牛飼娘。穢れた赤子の産声と絶望の絶叫が響き渡り——その先に起きた顛末を、余人が知ることはなかった。



雑えた空気淀む洞穴の湿った土の上に転がされ呻く少女達……彼女らは希望を胸に初めての依頼へ赴いた冒険者である。しかし小鬼の首領の奸計にて敗れた一行の4人は既に2人へとその数を減じており、残った彼女らをも捕らえ輪姦する小鬼達。折あしく小鬼退治の専門家が別の小鬼の根城の掃討に遠出していなければこの末路はなかったろう……が、そうはならなかったのだ。

「GROB！！GROBGROB！！」
「GRRRR……GROBB！！」
「いっぎいっ！あ、ああ……何故こんなっ！地母神様……うぐっ！」
「あぐうっ、痛いっ！こんな乱暴にいっ、難し……ひいっ！！」

柔肌に小鬼の尖った爪が食い込み、鮮血生じる傷口の苦痛に呻く女神官と女武道家。彼女らが反射的にもかき逃れようとするたび小鬼らは彼女らの仲間……女魔術師であったものの末路を見せつけ脅す。逆らえば次は——と暗示するような行いに彼女らの抵抗の意思はヘシ折られ、小鬼らに犯されるままとなってしまう。

「ナカにいっ、ごぼごぼってえ……うううっ！もう、やめて……うあっ！妊娠っ、いやああっ……！」
「またあ、子宮……重いっ！ひっ……嘘、うそおっ！ナカで動いてなんて、絶対……！」

ひゅるりひゅるりともう何度目になるのか分からぬ小鬼の欲望が、ほんの数日前まで穢れ知らなかった女神官の胎に植えられた。隣の女武道家も鈍く伸び肉羊埋められた性器から胎に収まるぬ汚濁を逆流させたのを見るに同様に種付けをされたのだろう。……幾度目からだろう、あらゆる人族の胎をも汚辱すると言われている小鬼の種が胎内に芽吹いたのを感じ出したのは、

「うぐ、はああ……ひぎっ！ま、またナカに……許してくださいっ、これ以上はっ！これ以上っ……ああああッ！？」
「うああ……子宮、かき混ぜられてえっ！もういやあっ、誰か助けてよおお……！」

一頭の小鬼が欲求を吐き終えればまた新たな者が股ぐらに下卑た欲求を滾らせて女神官に、隣の女武道家にのしかかってくる。当然のようにまた繰り返される凌辱と、子宮の重みを粘つく白濁で増させる行為。それほど過酷な扱いの中でも子宮に根を張ったドス黒い塊は流れることなく肥大を続け、そして——

「もうやめて、ください……お腹くるしいんです。だから、だから……あぐううっ！」
「ひ、ぎっ……はあ、はああっ！のしかからないでえっ、パンパンで辛いのお……ふぐえっ！」

この過酷な冥府の底でも祈り続ければ己が小鬼を生んでしまう前に助けがくるといふ、そんな願いを断ち切るような悲鳴。小鬼に群かられ股を乳房を喉を翻られ穢されてきた女武道家が激しく身悶え脂汗浮かべた全身を痙攣させ始めた。ふしゃりとその股がぬるま湯を溢れさせ、性器に溜まり溜まった白濁ごと体外へと流れ落ちる。

「おなかがつ、ナカからでっ……ふぐううッ！！やあ`ああッ、うむのイヤあ`ああッ！！」
「あ、あ……うそですっ、こんなっ！いと慈悲深き……ッ、ぎい`いッ！？」

助産の役目もある地母神の神官であった彼女はその意味をハッキリ理解してしまった。苦痛に呻きながら必死に何かを拒絶している彼女の胎で何が起きているのかを。そして同時……女神官のポテ腹も急激な引き撃る痛みを生じさせ終末の時が来たことを彼女に知らしめる。

「じ、陣痛うッ……あ`あああッ！嘘うそウソですこんな`ッ……ぐざい`イイッ！？」
「ママ`ッ、なりたくな`ッ……ごごおっ！？メリメリいってる`ッ、やあ`アアアッ！！」

痛苦に引き撃る呻きの輪唱が淀んだ洞窟に響き渡り、小鬼らもその意味を種族本能で理解し哄笑を発する。ゲタゲタと下劣な野次を発して痙攣する腹を踏みつけて押し、性器を押し開けて内を覗こうとする小鬼ら。人の尊厳を全て奪い去られた中で本来神聖である母となる行為を強要された2人は揃って絶望の叫びを発した。

「GROB！GROB！GROBB！！」
「GROOOOOOB！！」
「こじあけッ、でてッ……はぐぎゅウウッ！？地母神さま`アアアアアッ！！」
「たすけてだずげでえ`ッ、だれでも`ッ……があ`アアアッ！う`まれるう`ウウウツツ！！」

いよいよもって産痛が最高潮に高まりおそましさと心身両面を蹂躪する感覚に悶絶する2人。子宮より這い出た何かか2人の性器を押し開け今まさに産まれ出ようとしていた。嘲りながら彼女らの乳房や肢体の随所で肉羊を刺激していた小鬼らが精を放ちながら放った奇声と彼女らの慟哭が重なる。

ピュルピュルピュルウウウッ！ドバピチャッ！ドブドブピュルルルウッ！！

「あ`ッ……！あがっ、はが`ああっ……かひゅっ、うぐううっ！あ、あ……？」
「ぬけ、た……あ`ッ、ふぐ`ああっ！ひゅ、ぜひっ……え、ああっ！」

するり、出産のその瞬間に精浴ひせられた彼女らの股から重みを持った塊が抜け落ちる。子宮内と未だヘンの緒で繋がっているその緑の物体を茫然と胡乱な双眸で凝視する女神官と女武道家。ソレがキァキァと産声を響かせた瞬間、彼女らは表情を凍り付かせその顔色を絶望の一角に染め上げた。

「い、いやあああッ！ちがう`ッ、ちがいますう`っ……こんなうんでなっ、いぎっ！？ひっ、やめっ……！」
「こんなユメだよウソオオッ！！ゴブリンのアカちゃんなんてえっ……が`ひっ！まさか、またっ……！？」

背徳悲嘆後悔忌避、あらゆる負の感情が爆発したような悲鳴を発する2人。その胎より胎盤をヘンの緒掴んで荒々しく引き抜いて悲鳴を呻きに変えさせた小鬼が彼女らにのしかかる。まるで、孕み袋の役割が未だ始まったばかりだろうと無慈悲に告げるかのように、

「うぐ`あっ、うんだばかりでえっ……だからっ！せめて……ひい`いいいっ！？おじひっ、じひをおおっ！！」
「あ`、あ``ああっ！しきゅう、もうよごすのやめ……ひあ``あああッ！？」

出産したてで緩んだ穴であるうとも容赦なく肉羊を挿り付け性衝動を昂ぶらせる小鬼ら。孕んでいた腹をたらしなく棄ませた女神官と女武道家は、その身を振って逃れようとするも叶うことはない。悲痛な叫びを上げる彼女らの声に欲望を解き放つ小鬼の下卑た嬌声が重なり洞窟に響いた。

彼女らを小鬼の解卵器とした穢れた凌辱と繁殖のサイクルはこれからも続けられるのだろう……この絶望の日々にいついかなる形で終止符を打たれるのか、それは彼女らが知りうるものではなかった。



「本当は俺のガキで腹ボテなるまで犯し抜いてやりてえが、さっさと逃げねえと追手が来そうなんでな……あばよ、牝豚ども！」

小鬼の巢の入り口に立った斥候姿の團人が暗闇へ落ち窪む穴倉へと人影2つを投げ落とし、身を戒められ苦痛に呻きながら闇へと転げ落とされる女性2人、彼女らは冒険者ギルドの受付嬢と至高神の神官たる冒険者の監督官、かつて彼は彼女らの審査により冒険者の最低位までの降格処分を受け……報復を企んで棄て眠らせた2人を街より渡ったのだった。

「イァッ……くっ！急に眠気が来て……私、あの團人に？今はそれより……ここは一体？」
「あの團人、降格だけでは生温かったです。必ずや至高神の裁きに……ひっ！？」
「GRRR……GROB！！」
「GROB！？GROB……GROBGROB！！」

棄て朦朧としていた意識から叩き起こされた2人が目にしたものはこの巢穴を根城にする小鬼の群れ、下劣な妹魔らは自らの根城に人が投げ込まれる珍事の原因を訝むより、自らの好む進物が降って来た幸運に猛る。縛られた身で逃れようともかく彼女らを取り押さえると薄汚れた手でその着衣を引き裂きにかかった。

「下劣なゴブリン風情がっ、くっ！縛られていなければ……ひいっ、やめなさいっ！」
「いやっ、離してっ……離しなさい！汚い手で……あっ、服があっ！？いやああっ……！」

至高神の神官として相応の責を担えるだけの研鑽を経ている監督官とて縛められては抗うこともできない、一切心付なく、縛られていなくても結果に差はなかったらう受付嬢同様に小鬼らの意のまま裸身を晒させられてしまう、きめ細やかな美しき色白の素肌は今や小鬼に踏み躪られるのを待つばかりになっていた。

「ああっ、痛ッ……そんな乱暴にっ、いぎっ！あぐっ、これも全てあの團人のせいで……うぐあっ！」

良家に生まれ育ち自らの意思で選んだ道へ不自由なく進むことができた才媛である受付嬢にとって苦境とは縁遠いもの、小鬼の餌食になった女性は職業柄敵え切れぬほど見たものの、そこに自らが加わることも考えたこともない、それが今や吐き気を覚える呼吸を浴びせられながら生肌の不衛生な手指を這わされているのは悪夢を見ているように思える。

「ひいっ、気持ち悪いっ……この卑賤な混沌の僕どもおっ！必ずや神の怒りが……い、いやあああっ！！」

即座に犯されるのかと思えば脆弱な粘膜をかき混ぜてその上の突起辺りを舐め回してくる小鬼、前戯をする小鬼など聞かぬしそんな品性がある筈もなかったが、しかしこの愚昧な者らとて字ひはするのだ、そこを刺激され続けた人の牝がどうなるのか……その答えはすぐに受付嬢の身に訪れる。

「あ`あっ、やだっ……もう止めてえっ！漏れっ、漏れちゃ……う`、くらッ！ダメッ、ダメダメダメ……あ`ッ！？」

街で拉致された受付嬢がここまで運ばれてくる間、当然ながら用を足す機会などなかった、そこで鋭敏な性器の肉ごと膀胱を裏から刺激されて尿口をザラつく舌で鬨られれば我慢をしようと長続きはしない、悲痛な叫びを上げて身を振った受付嬢の忍耐を衝動が完全に上回った瞬間、宙に響き渡る水音。

「GROROROR……GOBB！！」
「あ`~~~~~……や、あっ！私、漏らしちゃ……ひいっ、飲んでるっ！？いやあああっ、やめてええっ！！」

ジョロジョロと派手に放水音を立てて我慢の決壊した受付嬢の尿道が黄金色の奔流を噴き出す、更にそれを小鬼が口を開き飲み干し始めるのを見るや羞恥と嫌悪の混濁した混乱に包まれるその思考、小鬼は人の女性の、特に尿の臭いに強く執着する性質を持つと彼女は想像もせぬ形で思い知らされたのであった。

「GOBGOB、GROB！！」
「あ、ああっ……こんな最低な、ことっ！うああ、私……もう、いやあっ！えぐ、ひぐっ……」

人の敵対者としては最底辺である愚劣で卑賤な存在に鬨られ童女の如く無力に失禁姿を晒す——そこに脚指するような下卑た嘲笑を浴びせられれば受付嬢の自立した女という自意識は踏み砕かれてしまう、認めがたい醜態を、漏らした体液を摂取される姿まで晒してしまった自己嫌悪に彼女はすすり泣くしかない。

「GRRR！GROB！！」
「GROB！GROB！！GROB！！！！」
「う、うう……ひああっ！？来ないでっ、ひっ……誰かあっ！助けてっ、誰でもいいですから……ああッ！？」
「ああっ、至高のお方よっ……どうか、どうかっ！お慈悲をっ……ひっ、キャアアッ！！」

自らを支えて立つ柱を折られ悲嘆に暮れる彼女らにここまでが余興とばかり欲望をいきり立たせた小鬼が群がる、凌辱者が邪魔な縄を切除しようやく縛めは解かれるも、今や抵抗など叶わず無防備な股に縋りついてくる小鬼、性器に押し当てられる異物の感触の直後……受付嬢と監督官、2人の身を裂かれるような叫びが宙に木霊した。

「あ`ッぎいっ……ッ！？嘘っ、私に小鬼のがっ……ぐぎっ！あ`あっ……抜いてっ、いぎやあ`ッ！？」

想い人に捧げられるとは思ってはいなかったが、それでも精々が実家の都合で政略婚の相手と——そう考えて保ってきた受付嬢の貞節は小鬼の不衛生な恥垢まみれの泌尿器で穢されていた、本能的な嫌悪と拒絶が溢れもかく彼女らを取り押さえ、手に乳房に頬に擦れた肉棒をなすってくる小鬼ら。

「ぐぎひい`ィッ！？嘘っ、嘘嘘嘘おっ……夢だと仰って下さいませえっ！何故こんな試練を……えぎやう`ううッ！！」

いかにも取り溜ましているような綺麗である人の牝が無様に喚く醜態、それを目にし小鬼らは嗜虐心をなお逞らせる、異形の言葉で語り嘲い貶し哄笑を上げ、そしてより惨めさを覚えさせられた牝を更に荒く鬨り高揚する繰り返し、絶望の無い彼女らは今やどう抗えばいいのかわからぬ見失いながらこの絶望が過ぎることを祈るばかりであった。

「GROB！GRRRRRR……GROBB！！」
「GGGGR……GROOOOOOOB！！」
「え、なに……急に動き早く、まさかっ！？ダメえ、それだけは絶対やめて……御願います！ひい`ィッ！？」
「ああああッ！！天のお方よおっ、何でもしますっ！もっともって信心深くなりますからだからっ……あ`アアッ！？」

やがて終わりは訪れる……受付嬢と監督官にとっては最も望まぬ形で、興奮を高ませ続けていた小鬼らが猛然と彼女らに叩きつける膝の動きを速め出す、その意味に気付いた2人は表情を青穢めさせて必死に静止を叫び助け求めるもいずれも意味をなさない、そして——

ビュルッ……ドビュルビュルドブドポポオッ！！ドクドクドクッ、ベチャビュルウッ！！！！

「いあ`アアアアッ！？ナカで弾けてっ、ドロドロのがっ……やめて抜いてっ、デキちやうううッ！！」
「ひい`ィッ、小鬼の汚いのが注がれっ……あ`アアアァ！？うぶっ、げぶっ……んぐはへえッ！」

2つの絶望の声が重なって淀んだ空気を揺るがし、喜悅の奇声を上げた小鬼らが声の主汚濁を注ぎ浴びせた、ヘドロのように濁った粘液が受付嬢と監督官の膣を満ちし子宮にまで注がれその肌身をも生臭く塗装する、認めがたい現実から目を背けたけれど、胎に溜まる粘つく重みの実感に決して消えることはない。

「あ、あ……おわっ、た`あ……わたし、けがされて、あ、ああ……う、うううッ！ひっく……うぐっ、何いっ！？」
「ぐ、うう……このような仕打ちっ、あああ！どうして……ひっ、まさか！？まだする気……いつぎいッ！？」

凌辱者が退けば空いた性器からドロドロと溢れてくる胎を汚された証の白く濁った汚濁、絶望の表情を浮かべた受付嬢が涙み、監督官は己の神に必死で救いを懇願する、だが……そんな心痛に沈む暇すら与えず新たな猛りを股間に漲らせた小鬼達が彼女らに押し掛かり腰を突き立てた。

「もう休ませっ、あつがああッ！助けて助けてたすっ……うぐっ、むぶう`っ！？んう`うううッ……！！」
「あ`アアアッ、我らをお救い下さい神よっ……ぎひい`ィッ！？これ以上は本当に孕んで……あ`アアアッ！？」

この凌辱は深く昏い穴底にていつ果てるともなく続くのだろう、早くも彼女らの胎の中で脈動を始めた穢れた魂が形をとり、産声を上げるまで、或いは、その先もずっと——それが、職務上のこととはいえ人からの憎悪を買ったとされた彼女らの辿った末路であった。



「GR……GRRRROB！！」

「しまった、これは魅了っ——ふっふっ、ゴメンねえみんなあ？ご主人様の敵なら排除しないと、ねえ♪」

妖精弓手の所属する冒険者一党は小鬼の巢穴の掃討依頼を受けて出立し、その先で小鬼英雄率いる群れと戦っていた。戦闘の最中……彼女は奇妙な精神への干渉を感じて抵抗を試みるも術の力に押し潰され小鬼の術士の傀儡となってしまう。背後から矢を浴びせられ混乱した仲間達は忍ちに小鬼らに殲滅され果て、生き残りの彼女を贖に始められる血生臭い戦勝の宴。

「GROOOB！！」

「げっほおおッ……あはあっ♪ご主人様あ、そんなに激しくしたら私コワれちゃ……おごおっ、うぐええっ！！」

仲間の屍が乱雑に打ち捨てられた血溜まりに、凌辱を受ける妖精弓手の苦痛とそれを術で上書きされた嬌声が響く。小鬼英雄の逸物、彼女の太腿ほどもある巨塊を性器に挿り込まれながら彼女は笑顔で浮かべ凌辱者に媚びていた。速くは生き残りの仲間の女神官が輪姦を受け悲痛な叫びを上げるも、その視線すら向けられることはない。

「おごえ`エエッ……おなかあ`ッ、ポゴンポゴンされへえ`ッ！わらひご主人様に愛されてリ`ゆっ♪げほおッ！？」

まるで童女のように膨らみない胸部をした華奢にすぎない膣にはあまりに拡張を強いすぎる挿入。小鬼英雄が荒々しく腰を突くたび、妖精弓手の膣は重荷を捻じ入れたスタ袋の如く歪に膨らむ。引き裂かれんばかりに鋭敏な粘膜に負荷を掛けられつつもその嬌声は止まることをしない。

「GROOOB！！」

「……GROBB、GROB！！」

「お`、おじりがあ`アッ！あががっ、はがっ……ッ、ぎひい`イイッ！？」

その時、己だけで御愉しんでいる首領を不満に思った小鬼の一体が妖精弓手の体にその薄汚れた手を伸ばした。自らもこの牝を使う権利があると自己都合のみの思考が頭に浮かび、白濁を未だ吐き零す性器に向けられる目。牝穴を使う前の掃除とばかり、何の加減もなく瞳孔へと鋭い爪の伸びた掌が挿り入れられ……直後。

「おしりッ、ごわれ`ッ……アソコさけてえっ！じぬっ、しんぢやっ……あ`ッ！？あ、あれっ……？」

肛門に殺人的な拡張掘削を施されつつ直前まで同様の行為に遭っていた窟を爪立てた手で穿り抉られ筆られる……その今この瞬間に絶命してもおかしくない負荷に妖精弓手の双眸が見開かれ断末魔の如き絶叫を上げ放った。同時、死に顔した彼女の精神が己の心を歪めて支配する術の拘束力を上回る。上回ってしまう。

「あ、わたし……私`ゴブリンの術で、みんなを後ろから……あ、あぁっ！ひっ……！」

正気に戻った妖精弓手の認識した世界……まるでスタ袋に雑貨を押し込む如き乱雑さで掘削拡張凌辱される己の膣。子袋を蹂躪され穢されて、今は小鬼の汚い手で扱られる性器。それを唯の今まで悦び媚びていた認めがたい己。そして——自らが殺害してしまった仲間達が無残に散らばり赤黒く染まった鉄錆びた異臭放つ周囲の光景。

「あ……あ`あ`あ`あ`あ`ッ！？違うのォ、ごめんなさいゆるして許してええっ！私ッ……ごぼえ`え`え`ッ！？」

「GROBB！！」

今更に操られた己が為したことの残酷な結末を突き付けられ半狂乱に陥り慟哭する妖精弓手。しかしそんな彼女に打ちひしがれる間など与えてやりなどせず、小鬼英雄は排泄器の蹂躪を再開する。自責と痛苦に心身の両面を磨り潰す如く攪拌され、彼女は無力に悶え泣き喚き慟哭するしかできない。

「GRRR……GROB！！」

「ねえさま`ッ！にいさま！たすけ……うぐっ、またあっ！？洗脳いやあぁッ……オ`ッごオオッ——あ`っ♪」

絶望に総身を埋め尽くされもがく彼女を鬱陶しそうにした小鬼英雄が小鬼の術士に命を飛ばす。陰で舌打ちした術士が魅了の術を唱え、再び自らの心が侵されるのを感した妖精弓手は必死に抗った。だが小鬼英雄が彼女の膣管を突き破らんばかりに穿ち、術士の詠唱が完了した瞬間に落け果てるその双眸。

「あへええッっおまんこに`イッ、オシリまでえ`ええッ！いっぱいレイプしていただきうれしいれしゆう`うラッ！！」

たった今、人としての尊厳を踏み躪られる苦境を嘆いていた少女はその元凶に浅ましく縋り待てる。自らの心が都合のいい玩具と化されていることも気付かず凌辱に卑しく嬌声を上げ放った。その無様な落羞に哄笑上げ放つと更に腰の勢いを速めて妖精弓手を犯しにかかる小鬼英雄。

「おごげえ`ッ、おちんぼ様……深い`イッ！あひい`ッお腹の中ぜんぶおちんぼ様になっひやう`うラッ！！」

小鬼英雄が手淫の如き荒さで上下に揺する妖精弓手に跳びついた小鬼が腫れ上がった性器に挿入し腰振り始める。幾千を生きる長命を性処理一つのため浪費されるような強姦を受け、小鬼達の欲望の掃け口と化される彼女。然様な暴虐を浴びながら操られるまま淫声を上げ放ち、作られた悦び貪る彼女の心に正気に戻ることは最早ない。

「GROB！GROOOOB！！」

「GROBGROBGROB！GROB！！」

「あがッ！おげッ！ぐげへえ`ッ！くる`っ、またドポってえ`ッ……くらしやいっかいっぱい——ッ！！」

貧相すぎる胸元に小ぶりな臀部に爪立て荒々しく膣を窟を蹂躪しながら高揚した奇声上げ放つ小鬼英雄ら。突き上げられた膣奥趣しに肋骨軋ませられる苦悶に白目を剥きながら妖精弓手は穢れを懇願する。猛然と瘦躯に浴びせられる凌辱行為は遂にその果てを迎え——

ポピュリユリユリッ……ドブドブグボゴポオオッ！ドグッドグッ！ピュルルルヴウウウツツ！！

「げっほおッ！おぶえ`ええ……ごぶふおっ！？おほれっ、せーしっ……げほおっ♪ぐぶっ……ほへえ`えええッ！！」

あまりに凄まじすぎる射精量に消化器に収まらなかった汚濁汁が逆流し喉奥から排出され口腔より吐瀉される。体の尻から喉までを、胎の底までも凌辱者の種で満たされ溢れ零させながら絶頂を迎え歓喜に震える妖精弓手。魔術に作り出された偽りの随喜だが、それでも彼女は犯されその身を穢され尽くしながら絶頂に達したのだった。

「がへっ、ほひゅっ……！おしりかりゃ、おクチまで……せーえき、いっぱい♪げぶっ、しあわしえ……ッ、お`ッ！？」

「GRRR、GROB！！」

「あ`っ……あ……？」

腹を歪に膨張させ精液に濡れる妖精弓手を抱え貫いたまま洞窟の広場の端へ運ぶ小鬼英雄。そこには彼女の裏切りの結果、取り巻きの小鬼らに欲望の限り輪姦され横たわる女神官の姿があった。弱々しく息を吐き虚空に意識飛ばす少女の真上にて妖精弓手の尻穴を塞いでいた肉粒が引き抜かれる。

「ぶ`ごぼお……おぼえ`ええっ！？げぼっ、やめっ……あぶっ、うえ`ええっ！！」

「あひゃへえ～……おせーしプリプリもれひやいましたあ♪ごひゅじんじやま、ごめんなしやあい……えへへえっ♪」

粘質で下劣な空気音を発して排出された小鬼英雄の子種汁、膣管の異臭しみ込んだツレを浴び濡れる女神官。仲間を汚濁し苦しめる行為を強要されつつ妖精弓手は恍惚に震え卑しい嗜いを上げ放つばかり。……やがて、その狂った笑いは猛る小鬼の吼え声と共に断続的に搾りたされる嬌声へとまた変じる。

血生臭さに精臭を混ぜた濁む空気に響き渡る淫猥な交わりの声と行為の音。——その後、小鬼退治に向かいし消息を絶ったある冒険者一党の行方を知る者は現れることはなかった。



剣の乙女——冒険者の中で例外的な白金級を除く実質最高位たる金等級、人より羨望を受ける存在である彼女。そんな彼女の秘密、彼女は過去に小鬼に囚われ穢され嫌悪と忌避感と痛苦、そして背徳の悦びを身に植え付けられていたのである。過去を思い起こせば浮かぶおそましさと裏腹な認めがたい体の熱……それは日を経るほどに肥大していたのであった。

「GROB！！GROB！！」
「小鬼っ……ひいっ！あ、ああ……助けて、誰かっ！い……いやあああっ！！」

水の都を襲った小鬼の兇刃……その解決のため依頼を送った小鬼の専門家は偶々辺境を離れており、彼女の元には現れなかった。代わりの如く襲撃しに現れた小鬼を前に、彼女は戦えば露の如く払える矮小な敵に怯え凍むことしかできない。下劣に哄笑上げる彼らの巢に連れ帰られる剣の乙女の下腹部で女の部分が熟宿し疼いたのはさて、錯覚であったろうか。

「きゃあっ、見ないで下さ……ひいひいっ！！」
「GROB！GROB、GRRRR……？GRO？」
「嗅がないでっ、あっ……いやあああっ！！」

汚濁した臭気瀰む巢に持ち帰られた剣の乙女は身を取り囲む小鬼らに身を凍ませている。下劣な獣欲滾る表情を隠しせず彼らはその薄汚れた手を純白の法衣にかけ、引き裂き裸身晒させる。豊満にすぎるその身を拘束して股を無理やり開かせ……心と首傾けて脚の付け根に放寄せ体臭喚ぐ小鬼。

「GR……GROB！GROBBB！！」
「GGGGG、GROBBB！！」
「違う、違いますわっ……これはっ！とにかく違いますっ、いやっ……見ないで下さいっ！！」

彼女の秘部は小便ではないヌメる体液で湿潤しており、それを見咎めた小鬼らが一斉に下劣な哄笑を発した。言葉が通じずとも彼女は語調から彼らが何と己を嘲っているのか理解してしまう……コイツは淫乱女だ、と。自身でも認めがたい卑しく背徳的な性根を暴かれ、取り乱して叫び否定するよりない剣の乙女。

「んぐうっ、臭いっ……ひあっ！ダメですそこっ、敏感な場所です……ひい`いいいん`ッ！？」

凌辱に無様に泣き喚ぐ女が彼ら小鬼のお気に入りの玩具であるが、この浅ましい牝には違った嗜虐心を湧かせた。敢えてその鼻先に頬に恥垢に薄汚れた肉芽突き付け、乳房捏ね股穴に舌這わせその上の突起を掴む小鬼らの手口。女性として成熟し切った股体を下種な小鬼の玩具にされてしまう……その羞恥的な扱いに剣の乙女は乱れ悶える。

「臭くて汚くてっ、気持ち悪いっ……嫌な音なのいっ、ほオンッ！？感じたくない、のにっ……きゃひイッ！！」

小鬼の精臭を嗅がされあからさまな玩弄を体躯に施されながら剣の乙女の発情はいや増すばかり。乳頭と股豆は弾けんばかりにシッコって秘部は飢えた獣の如く凝を滴らす。己らに犯される前から欲情している淫乱な牝は見たことがないとはかり下卑た声音の野次放つ小鬼ら。

至高の神の神殿における最高位の聖女、魔神王殺しの英雄——そんな肩書に一切の価値を見出さず剣の乙女を凌辱する小鬼ら。小鬼らに凌辱された時より遙か成熟した彼女の豊満な股体は荒々しい扱いを受けつつも順応を示してしまっていた。は魅惑的なラインの臀部の合間にある窄まり、排泄器にまで凌辱を施され始めるとたまらず喘ぎ悶える。

「はひっ、くひゅう`ラッ……い、イヤなのにいっ！どうしてこんなっ、カラダあつく……んぐ`お`おおおっ！！」

豊満な乳房に瓜が、歯が立てられながら生殖器と口舌……そしてあるうことか肛門まで強姦される苛烈な凌辱。冒険者の頂点に昇り詰めた自身、それが最底辺の妖魔の孕み袋へと墮とされる背徳と倒錯の感覚が彼女の理性を責め苛む。いかに嫌悪を奮い起こし否定しようとも小鬼の肉種で扱られる子宮が切なげに蠢える実感を払うことはできない。

「おっぱいもおシリもナカもきたないところもおっ、めちゃめちゃにされてるのに`ッ……ぐぶっ、むぐう`うらうん`ッ！！」

金等級、例外を除いて冒険者の最高頂点にまで登り詰め聖女として羨望浴びた存在——そんな肩書には片鱗も価値を見出されず唾棄を受けながら小鬼らの劣情を叩きつけられる剣の乙女の肢体。やがて、その身を凌辱していた小鬼らの乱暴な行為は急激な加速を見せていく。

「もごおおっ！？(来るっ、来てしまおう……ゴブリンのっ、汚くて臭いお汁っ！出されてはいけけない穢れがっ……！)」
「GROB！GROB！GROB！！」
「GRRR、GROBB！！」
「HOOOOOOOB！！」

逃れようのない、遍く人の女を孕ませるといふ小鬼らのドス黒い欲望が解き放たれる時……その接近を感じ取る剣の乙女。夢と希望を胸に旅に出た自分を踏み潰り奈落の泥潭へと駈つけた感覚が今また自身を襲おうとしている。今度は人としての人生に戻れぬやも、そんな末路を予感しつつもその子宮は熱く燃えて雄に媚び——そして。

ドク……ドクドグドグドグウツドボボオッ！！ゴボボビチャビチャビチッ、ドブドポボブボオッ！！！

「うぶうっ、げほおっ！？い`っ、ひあ`アアアアッ……いぐっ！ゴブリンザードンどぼどぼされてイツグウウウツ！！」

脈打った凌辱者の肉筒内より迫りくる熱塊の動きすら剣の乙女がその臙肉でハッキリ感じたその直後、衝撃。子宮を殴りつけるような激しさで叩きつけられた粘つく奔流が忽ちに頸管押し開け子宮に流れ込み内を汚辱する。雄に種を付けられる牝の被征服感の遍くを精神に染み渡らせながら剣の乙女は絶頂に至り、その身に白い洗礼が浴びせられた。

「ほお`オオッ`ッ、ごぼっ！ぜんしんっ、ナカもそもおっ……アツくてコいのがあっ、ひやひい`イイイッ！？」

子宮が人ならざる邪悪の卵卵器へと染め上げられる背徳に今一度その魂を染め上げられながら感極まる剣の乙女。胎に愚鈍な劣等的存在の種をつけられ最下等である混沌の走狗の欲望にて身の濁りを汚濁される……至高の神の最も近くまで功德積んだと称えられる己の卑賤すぎる有様に被虐の劣情が盛り、彼女を焦がした。

「HO、HOOOOOOOB……！！」
「んぎはあッ、ほお`おおおっ……あ`あっ、もれええっ！？は、はひえあ~~~~~……♪」

するりとぼおっ、彼女の下腹を早くも孕んだように膨らませた種汁の遊りが引き抜かれ逆流する汚濁。産が快し開けられたまま無防備にその内を晒すそこに粘つく体液が噴き零れる感覚に剣の乙女は失禁してしまう。その目隠し越しにも双眸閉ませ完璧な造作を淫らに濁かし歪ませたことが明らかな表情には威厳は一切残っていない。

「GRRR、GROB！GROB！！」
「GROOOOB！GROBGROB！！」
「う、あ……んぎ`いいいいッ、もう次いっ！？ひぎ`オオッ、私コワれちゃ……ひやぐウウウツ！！」

孔が空いたと見るや獣性に滾る肉輪を隠しせず先を争い群がって来る小鬼ら。股穴に尻に、小便奪す尿道すら押し開けられぬか試そうとしてくる一切の容赦なき衝動が彼女を襲う。しかしそれでも、剣の乙女は卑猥に発情した喘ぎ漏らし凌辱をあるがまま受け止め一切の抵抗すらしない。

「GOB、GROB、GRRRROB！！」
「GROBGROBGROB！GROB！！」
「ほお`ッ、全力で種付けにきてっ……こんなの絶対妊娠しちゃいますうっ！ほお`ッ……んへえ`エエエエツ♪」

深き闇の底に発情し切った獣同士が交わり合うような下劣な声と湿った衝突音が木霊する。彼女の胎の奥で早くも芽吹き脈動を始めた塊が形成して産声上げる日も恐らくそう先ではない——剣の乙女、至高の神の聖女として名高き敏やかな大司教の辿った末路は概ねこのようなものであった。



ゴブリン・スレイヤー



ゴブリン・スレイヤー



















